

音 楽 科

乗 富 章 子
沢 野 景 子
東 実

1 音楽科の本質について

私たちは、音楽科の本質を次のように考えている。

楽しさを感じながら 自分の音楽的感受の世界を広げていくことができるようになること

子どもは、音や音楽の楽しさを感じながら表現や鑑賞の活動をすることによって、音楽のよさがわかり、音楽を美しい、快いと感じる感性が磨かれていくと、私たちは考えている。音楽的感性が磨かれれば磨かれるほど、次に出会う音楽に対して、より楽しくより美しい表現をめざして活動していくことが期待され、自分の音楽的感受の世界を自分なりに広げていくことができるようになるのである。

つまり音楽科の本質は、楽しさを感じながら表現や鑑賞の活動を重ねていくことで、自分の音楽的感性を磨き、自分の音楽的感受の世界を広げていくことができるようになることととらえている。

2 本質にもとづく基礎・基本について

上記のように音楽科の本質をとらえた上で、それにもとづく基礎・基本について考えた。

子どもは、友達と心を合わせて歌ったり、楽器を演奏したりするとき、音楽の楽しさを実感し、その喜びを味わっている。そこでは、音楽の美しさと同時に人の心の豊かさ温かさにも触れて、自分の気持ちや想い、ゆめや想像の世界などを大きく膨らませながら生き生きと表現している姿を見ることができる。その姿こそ、「楽しさを感じながら 自分の音楽的感受の世界を広げている」姿であろう。

私たちは、日々の授業において、このような子どもと音楽の自然なかかわりの姿や、音楽の美しさに感動し、積極的に音楽活動を進めようとする姿を実現するには何が大切かを考え、それを基礎・基本ととらえることにした。

まず前提となるのは、音そのものへの関心である。自分にとってどんな音が快いのか、どんな音を大切にしたいのかを感覚的にとらえさせたい。その上で、音に自分の心(想い)をのせて心から楽しいと感じ、表現しようとするのである。

すなわち、音楽科の基礎・基本とは、

音に心を動かし 音を楽しむこと

であるとした。

3 自己の学びを広げ深めるについて

音楽科における「自己の学びを広げ深める」とは、「音に心を動かし、音を楽しむこと」ができるような活動をしていく中で、子どもが音や音楽の楽しみ方を、技能の習得を含めて自分なりに身に付けていくことである。

子ども一人一人の音楽の感受の深まりや、活動への意欲や関心は、生き生きとした学習活動の原動力となるものである。その深まりや意欲や関心を持ち続けながら、自分なりの音楽表現を高めていくには、声の出し方やさまざまな楽器の演奏の仕方を身に付けたり楽譜を読む力を身に付けたりしていく必要がある。私たちは、こうした表現や鑑賞に必要な技能の習得を否定するものではないが、学習指導の最終目標とは考えていない。子ども自身が技能習得の必要性に気づき、技能を身に付けることにも喜びを感じるような指導をしていきたいと考えている。

それでは、子どもが音や音楽の楽しみ方を自分なりに身に付けていくことを促すような学びとはどうあればよいと考えられるだろうか。私たちはこれまでの実践を通してつぎのように考えた。

(1) 芸術としての音楽の特質に触れるような活動の工夫をする

芸術としての価値ある音楽に触れることは、子どもの心を大きく揺さぶり、表現や鑑賞への意欲を十分に高める引き金になると思われる。

音に対する興味を広げるために身近な楽器を含めてさまざまな楽器に直接触れるとか、心のこもった範唱や範奏に触れて心から感動するとか、思わず身震いするようなすばらしい生演奏に触れるなど、音楽の特質に触れるような活動の工夫をしていきたい。

(2) 自分なりの想いを持つことができるような活動の工夫をする

表現への自分なりの想いを持つことができるように、活動の内容や場の工夫をしていきたい。それは例えば、子どもの心を開放するような雰囲気づくりを工夫して新鮮な気持ちで音楽や詩にふれるようにしたり、心行くまで詩を朗読したり、音楽を聴いて素直に心に描いたイメージや思いをなるべく壊さないような授業の進め方を考えたりすることである。

そうすれば子どもは、他にとらわれることなく自由な発想で自分なりの想いをもつことができるようになるだろう。

(3) 自分なりの想いを膨らませた表現ができるような活動の工夫をする

これまでの実践で、子どもが自分なりの想いを持つことができても、それが表現に生かしきれなかったり、表現そのものが高まるほどにはならないことがあった。そこで、その原因が何かを探ると共に、子どもの心に自然に芽生える課題意識を大切に、その子がどんな想いをどのように表現しようとしているのかを見極めたり、子ども同士がかかわり合ってその想いを共感したりして個の想いを膨らませた表現ができるような工夫をしていきたい。

そのためには、個やグループによる活動を多くとって、個の想いが表現に生かされるような工夫をしたり、温かな心の交流が図れるようなグループづくりを工夫したりしていきたい。また、このようなときに必要とされる技能については、丁寧にしっかり定着するまで指導し、子どもが自信を持って表現に臨むことができるようにしたい。

(4) 自分の表現を振り返り、新たな意欲を持つことができるような活動の工夫をする

自分なりの想いを持ってそれを表現してきた子どもが、自分の表現を自分で聴いたり、発表したり、友達の意見を聞いたりして自分の表現を振り返り、自信と新たな目標に向かう意欲を持つことができるような活動を工夫したい。

表現が完成した段階ばかりでなく、途中でであっても、短時間であっても、個やグループの「音」に耳を澄ませる活動を保障したい。この時に、教師や子ども同士の温かな心の交流を心がけ、良いところを認め合う姿勢を持てば、子どもは次のステップの表現への想いを自分で確かめ、自信を持って進むことができるようになるだろう。

4 実践例 ー4年ー

(1) 題材名 せいしょうで合しょうでりんしょうで (この山光る 小さな世界)

(2) 目標・斉唱・合唱・輪唱の三つの曲態の違いに興味を持ち それぞれの歌い方で楽しく歌うことができる
・音が重なる美しさを感じながら合唱したり 相手のふしを聴きながら輪唱したりすることができる

(3) 指導にあたって

学習材について

中学年での輪唱、合唱は、高学年において音の重なりを感じとってその美しさに浸って合唱することができるようになるための大切な足がかりとなる。子どもはこれまで友達と一緒に歌いあわせることに楽しさを感じてきてはいるものの、まだまだ友達の声を聴きながら歌うことができなかつたり、音の重なりのおもしろさや美しさに気がつかないまま歌ったりしている姿が見受けられる。そこで子どもたちが明るく楽しい気分で歌え、音の重なりを感じながら歌える「この山光る」と「小さな世界」の二曲を教材として選び、上記の目標に迫らせたいと考えた。

「この山光る」は二部合唱に編曲されていて、3度、6度の音の重なりを感じとりやすい曲である。また「小さな世界」は二部輪唱の曲で、追いかけるパートが8小節遅れで入ってくるので相手の節をよく聴かなければきれいに重ねることができない曲である。もちろんどちらの曲も、斉唱では曲にあう歌い方を工夫し楽しみながら歌える曲である。この題材では斉唱、合唱、輪唱の三つの曲態で歌うことを通して、正しい音程やリズムに気をつけて歌おうとしたり、友達の声を聴きながら楽しく歌おうと意識する中でいろいろな歌い方の楽しみ方を身につけていくことを願っている。

本題材の基礎・基本

本題材の基礎・基本は、斉唱や合唱そして輪唱を通して、音が重なる美しさを感じとり、重ねて歌うことの楽しさを実感できるようになることである。歌う楽しさとは、自分なりの表現ができた時の喜びである。あるいは、自分なりの表現ができた時の心地よさであろうと考えられる。

4年生の歌唱表現において大切にしたい「楽しさ」は、音の重なりのおもしろさや美しさを感じて歌えることである。系統的にみると、低学年では自分が気持ちよく歌えた時、何より楽しく感じることができる。中学年に入ると友達の声や演奏を意識するようになり、友達と合わせることが一番の楽しみとなる。3年生では2小節ほどの部分合唱や短い練習曲で・・・4年生になると本格的な合唱曲(例えば「もみじ」)や響きを十分感じられるような輪唱曲で楽しめるようになることが求められる。高学年では、美しく響くハーモニーに浸って歌うことで子どもの歌の世界がさらに広がっていく。このように、子どもが歌に対する想いをどんどん膨らませ、歌唱力を身につけながらいろいろな楽しみ方を身につけてほしいと願っている。

学びを広げ深めるために

① 芸術としての音楽の特質にふれるような活動の工夫をする

合唱や輪唱の練習過程で、範唱用CDを聴くばかりでなく、教師と子どもとの二重唱やきれいに重ねることができる子どもどうしの二重唱を取り入れそれを聴きあう場を持つ。

そうすることで生の声の響きを直に感じることができ、あこがれをもって学習を進めることができると考えられる。

② 自分なりの想いを持つことができるような活動の工夫をする

子どもが好きな重なりフレーズを友達同士で歌い合わせたり、特にきれいに重ねたいと思う旋律を一人ずつ歌ったりする場を持つ。

③ 自分なりの想いを膨らませた表現ができるような活動の工夫をする

合唱や輪唱のパートを決めるときには、何度もいろいろなパートを経験して自分の思いや気持

ちを一番表せるパートを選ぶことができるようにする。またグループ学習では、その時の課題や子どもたちが問題だと感じた視点によってグループ編成を工夫する。

曲想表現において自分の好きな言葉に着目させたり、相互評価しあう際にはその個の想いを明確にしたりする。

- ④ 自分の表現を振り返り、新たな意欲を持つことができるような活動の工夫をする
 合唱や輪唱でその重なりに注意しながら歌いあわせていくなかで、バランスがとれた美しいハーモニーになっているかどうか録音再生して自分たちの歌を振り返る場を持つ。

それでは次にどのように学習が行われたか、本單元における授業の実際を以下に示す。

(4) 本單元における授業の実際と考察 (総時数 6時限)

主な活動と内容	学びを広げ深めるために
1. 曲の感じをつかんで「この山光る」を斉唱する (明るく楽しい感じで ホラヒ・・・のところを軽やかに歌う)	①
「この山光る」を二部合唱で楽しく歌おう	
<ul style="list-style-type: none"> • もっとすてきに楽しく歌えるようにアルトを練習して合唱する 	①②③
<ul style="list-style-type: none"> • 正しい音程で歌う(つられない) 	
<ul style="list-style-type: none"> • 発声に気をつける(どならない) 	
<ul style="list-style-type: none"> • 音のバランスに気をつける(他パートを聴く) [録音 再生] 	④
<ul style="list-style-type: none"> • 「この山光る」の合唱の楽しさを振り返る (二重に重なってきれいになって気持ちよかった) (二通り[ソプラノとアルト]楽しめた) 	
<ul style="list-style-type: none"> • 斉唱と合唱の楽しさの違いを考える (合唱は音が重なってきれいに響いたとき気持ちいい) (斉唱は旋律が一つしかないのて心一つにして歌えるところがいい) 	④
2. 曲の感じをつかんで「小さな世界」を斉唱する (楽しく弾んで 地球を大切にしたい気持ちで)	
「小さな世界」を二部輪唱で楽しく歌おう	
<ul style="list-style-type: none"> • どんなことに気をつけて輪唱したいのか考える 	
♪ 声の大きさ	♪ どのならない
♪ 音程	
<ul style="list-style-type: none"> • 追いかけるパートの入り方に注意して輪唱する (どんな風にそれぞれのパートが合わさるのかよくわからなくなってきた) 	
<ul style="list-style-type: none"> • 教師の範奏を聴き 重なり方を感覚的にとらえる 	①
<ul style="list-style-type: none"> • 二部輪唱の練習をする (速さはだいたいあうようになってきた) (一生懸命歌っているとバランスがよくわからない) 	♪ バランス
<ul style="list-style-type: none"> • 怒鳴らない 声の大きさ 音程 バランスのなかから自分の課題を見つける 	②
<ul style="list-style-type: none"> • グループに分かれて練習する 	③
<ul style="list-style-type: none"> • 全員で二部輪唱し録音再生する 	④
<ul style="list-style-type: none"> • 「小さな世界」の輪唱の楽しさを振り返る (音が重なるとおもしろくて楽しいよ) (斉唱も楽しいけれど 輪唱は2倍楽しめるよ) (友達のパートときれいに重なってよかったよ) 	



本単元では、二曲を教材として選び目標に迫らせたいと考えた。従ってそれぞれの曲においてどのように学びを深め広げることができたかについて考察していきたい。

① 芸術としての音楽の特質にふれるような活動の工夫をする

「この山光る」の合唱の練習の時、なかなか正しい音程がとれない場面で、比較的音がよくとれたB子と教師が二重唱をして全員に聴かせた。すると、生の声の重なるの美しさを肌で感じた子どもは、ぼくも私もと教師との二重唱を希望してきた。子どもは二重唱することによって音の重なるの感じがわかり、聴いている子どもはその響き合いをそれぞれの感性で受けとめ、少しずつ正しい音程で歌えるようになっていった。

また「小さな世界」では、斉唱から輪唱になった際、8小節遅れで追いかけるパートが入ると途中で止まってしまった。重なり始めたら自分の音がわからなくなったり、速さが速くなって途中で変だと気づき止まってしまったのである。さらに、どう重なるのが正しいのかがわからなくなったというので、オルガンで二つのメロディーを重ねた演奏を聴かせた。このことで子どもはきちんと二つのメロディーが重なりとすてきだと感じ、その重ね方を理解することができたようである。この後何度かオートリズムを伴奏にして練習するうちに速さが合い、きれいに重なっていく感覚が子どもたちに浸透していった。

このように友達の歌声や二重唱、範奏を耳にすることによって、その響きの美しさに直にふれて感動し、次なる意欲とあこがれを持って学習に取り組むことができると判断した。

② 自分なりの想いを持つことができるような活動の工夫をする

「この山光る」を斉唱で歌ったとき、大好きなところは?と問うとほとんどがホラヒ、ホラヤ ッホー等のカタカナの部分あげた。この部分を軽やかに歌いたいという子どもの思いを大切に、どんな歌い方がよいのかを探るため一人ずつ順に歌う場を持った。それぞれが工夫しているような声を出し試していたが、一人ずつ歌う友達の声を聞いていくうちに、自分がいいなあと思えた軽やかな発声の仕方をまねしようとする姿が見られるようになった。

「小さな世界」ではグループ練習にはいる前に、子どもが楽しい輪唱にするために大切だと考えた四つの課題(どならない、正しい音程で、声の大きさに気をつける、バランス)の中から一つを一人一人に選ばせ、その課題を意識して練習に取り組めるようにした。このことにより、集中して自分たちの歌声に耳を傾け、友達と心を合わせて練習しようとする姿が見受けられた。

これらのことから自分が楽しい、または大好きだと思ふこだわりの部分を見つけさせたり、自分が一番気をつけたいという課題を明確にすることによって、次の具体的な表現活動が生まれると考えた。

③ 自分なりの想いを膨らませた表現ができるような活動の工夫をする

「小さな世界」の輪唱の学習に絞って述べる。

初めての輪唱の際、前項でも述べたが教師の範奏後、全員で何度か練習するうちに速さも合い、少しずつ響きも出てきていた。しかし歌っていた子ども自身は合わせることに精いっぱい、まだ楽しさや気持ちよさを味わうには至っていなかった。何となくすっきりしない様子で録音して確かめてみようと言う意見や、もっと友達と練習をしたいという声が上がった。子どもはもっとすてきに響かせたい、もっと楽しみたいと思っていたのである。そこで自分の声と友達の声がびったり重なる醍醐味を味わい、楽しさを膨らませるために、グループ活動を取り入れることにした。この時、オートリズムを小さく流す、輪になって声を真ん中に集めて響かせる等の支援を行った。自分の課題を持つことでグループでの練習は生き生きとしたものになり、友達の目を見ながら声を合わせ、何度も歌い合わせようとしたり、響きを味わっているうれしそうな表情の子どもがたくさん見受けられた。この一連の授業の流れから子どもが想いを膨らませ、より楽しさを実感するためには、グループ学習を取り入れたことが効果的であったと判断できる。

一斉学習よりも人数を少なくしたグループによる学習の方が、自分の課題をしっかりと持って表現し、音の重なりのおもしろさや美しさをより実感できたようである。

④ 自分の表現を振り返り、新たな意欲を持つことができるような活動の工夫をする

どちらの曲の練習においても録音再生する場を設けた。

「この山光る」ではほぼ正確な音程で気持ちよく歌っていたが「この曲の明るさ、楽しさを

表せたかな?」と問いかけるとよくわからないという。録音して聞いてみることで、音量のバランスの悪さに気づくことができた。この後は、聞き役をたてて練習したり再度録音したりしてそのバランスに気をつけながら練習を進めることができ、子どもも納得できる合唱へと仕上がっていった。

またこの学習のまとめと振り返りで、斉唱と合唱の良さについて問いかける場を持った。斉唱はたった一つしかメロディーがないからみんなで心一つにして歌えて楽しい。合唱は違うメロディーが重なったとききれいで歌っていると楽しくて気持ちがいいと言う。斉唱と合唱以外でも楽しめる歌い方はありますか?と尋ねると、すぐ「輪唱」という声があがった。「小さな世界」の輪唱の学習を楽しみにしている様子だった。この振り返りにより次の新しい歌のスタイルである「輪唱」への新たな意欲を喚起することができたと考えられる。

右はこの学習を終えての子どもの日記である。

今日音楽の時間「この山光る」の合唱を
しました。二、三回練習したら歌でいい声
が、声の音がよく分かった。一つで
するのになりました。それを聞いたら、前より
アルトとソプラノのバランスがよくなりました。
前よりよく分かったのでうれしかったです。
でも、まだどなたも、うん、うん、うん、うん、
次はもっときれいに、うん、うん、うん、うん、

「小さな世界」ではグループ学習の最後に録音再生する場を持った。子どもは思った以上にきれいに響き合っていたことに満足していた。この後輪唱の学習がどれくらい楽しかったかを尋ねると(♡の数で楽しさを自己評価する。)ほとんどの子どもがとても楽しかったと答えた。(♡が一つ0人、♡が二つちょっと、♡が三つたくさん、♡が四つたくさん)

そしてどんなことが特に楽しかったのかと問うと友達と声を合わせて練習できたこと、きれいに重ねて輪唱することができたことと言う意見が多かった。

これらのことから、録音再生する場を持つことで、子どもは自分の表現を客観的に評価することができ、あらためて友達と表現することができた喜びを共感し合うことができたと思われた。また自分たちの表現の高まりも実感することができ、輪唱の真の楽しさを味わうことができたと判断した。

右上はこの学習を終えての子どもの日記である。

りんしよ、つ
今日音楽の時間「小さな世界」の
りんしよをしました。私は一番
をすることにきめました。
いよいよりんしよ。二番が音が
大きいので私はとちゅうでわかれ
かくなったりしたけれど、とも
だちと何回もれんしよするうち
うたえるようになりました。
りんしよするとちがうな感じにな
みたいでおもしろいなと思いま
すたやってみたいです。

以上のような授業の実際から、子どもは「この山光る」「小さな世界」の二曲を通して斉唱、合唱、輪唱の楽しさを十分感じとることができ、音が重なる美しさも実感できたことから本単元の基礎・基本を身に付けることができたといえる。

しかし、問題点として、つぎの2点があげられる。

一つ目は、本単元では、グループ学習を十分取り入れたつもりであったが、もっと効果的な学習ができるように、子ども一人一人の課題をベースにしたグループ学習の場があっても良かったのではないと思われる。そのことにより、自分の思いを生かすために必要な技術的な面が浮かび上がり、練習のポイントをはっきりさせることができたであろう。

二つ目は、音の重ね方に気づかせる場面でオルガンを使用したのだが、歌唱教材なので歌声で聴かせた方がもっとその響き合いの美しさを感じ取ることができたのではないと思われる。学習の中で子どもの状態を瞬時に見極め、そのとき必要な範唱または範奏を子どもに示していくことでさらに学びを広げ深めることができたのではないかと考えている。

以上、この二点については、今後さらに模索し研究を続けていきたいと考えている。